

# 郷土摂津 いにしえ通信

## 第54号 平成14年10月1日

発行 摂津市教育委員会 生涯学習課生涯学習課

〒566-8555 摂津市三島一丁目1-1

TEL (06) 6383-1111 TEL (0726) 38-0007

ホームページアドレス <http://www.city.selfan.asaka.jp/>



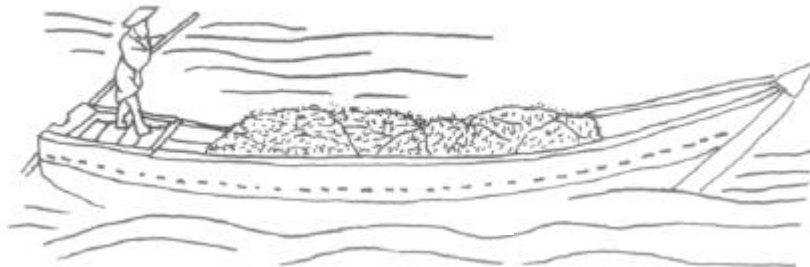
### 第7回 くらはんか舟



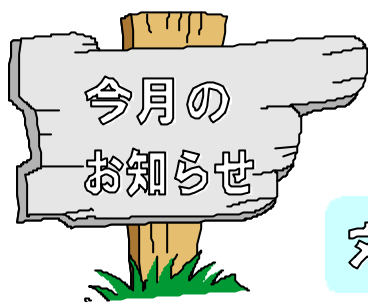
淀川における茶船が「くらはんか舟」と呼ばれるのは、それが悪罵（あくば）を表看板として、くrawnか、くrawnかと客をひいたので、通行の旅客がそう呼んだものであって、茶船仲間では、「くらはんか舟」と言わず、煮売船・煮売茶船または単に茶船と呼んでいました。

茶船とは、船上で茶店同様の営業をする船のことで、中世以後舟運の開けた諸河川・港津には、客船・貨物船の乗客・船頭等を対象として漕ぎ寄せ、あたかも現在の駅における駅弁、その他の物売りが旅客の旅情をなぐさめるのと同様に飲食物を売る小舟がありました。とくに、淀川のような流水の暖慢な大川では、舟運が早くから開けていましたので、相当古くから茶船はあったのではないかと思います。

和漢船用集（金沢兼光 宝暦十一年中夏脱稿・明和三年三月販布）には、煎売（にうり）船として「所々にあり。小舟にして酒肴を煎売するの舟也。あるひは餅くだものゝ類をひさぐ。摂州にて兵庫の磯、尼崎の川筋、往来の船につきて旅客にすゝむ。又川口入津（にふつ）の廻船、掛り舟に煎売するの舟あり。淀川筋にて、松が崎（枚方市松が鼻）近辺にいたって、昼夜往来の三十石舟に着て酒食をすゝめ煎売するの舟なり」と書かれています。



茶船という名称を有するものに大坂市内諸川運漕を掌る貨物船があります。これは上荷（うわに）船と同様に川口において入船の荷物を積取り問屋へ、又問屋からの荷物を出船へ積送ったものであって、「くらはんか舟」という茶船とは全く異なるものでした。



講座や展示のご案内、活動報告など多彩な文化財情報を毎月お知らせします。また、このページでは皆様の投稿を募集しています。

## 文化財愛護会・バスツアー参加者の募集

# 「石部宿場の里」の文化財をたずねて

月 日	平成 14 年 11 月 19 日 (火)
出発時間	午前 8 時 30 分
集合場所	撰津市民文化ホール前
解散場所	同上
解散時間	午後 4 時 30 分頃
参加費	5,000 円 (昼食代・入館料・保険料等)
定員	40 名 (先着順)
行先	石部町歴史民俗資料館・常楽寺・長寿寺
主催	撰津市文化財愛護会
後援	撰津市教育委員会
備考	雨天決行 (警報・注意報が発令された時は延期)

申し込みは郵送か電話で  
〒566-0024  
撰津市正雀本町 1 - 30 - 3  
電話 06-6381-1560  
橋本 秋作まで



右上 石部町の位置

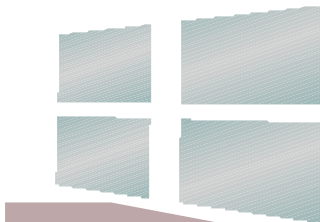
左上 常楽寺

左下 長寿寺

地図・写真とも石部町ガイドマップより



石部町は江戸へ下る旅人が京を発って最初に泊まるにふさわしいところでした。草津は京から六里で、泊まるには早く、水口は十二里と遠すぎました。そのため多くの大名などが宿泊する場所でした。宿場町であった痕跡は、道路の幅、民家の屋根など、今も町の景観の中に息づいています。



## 郷土史コーナー

### 三宅 (みやけ) の歴史

意外と身近な郷土の歴史を紹介していきます。

### 応仁の乱と三宅氏

#### 幕府の乱れと応仁の乱 (2)

嘉吉の変後、幕府の直轄地が守護勢力に押領され、徳政一揆の頻発によって土倉・酒屋が打撃を受け、これらの収入に頼っていた幕府財政は逼迫、五山借錢、五山献錢などの形で、五山禅院の経済に占める比重が増大した結果、蔭涼軒主の幕政介入を招きました。

地方の状況を見ると、九州ではすでに慢性的な戦乱状態に入っており、関東も混乱状態に陥り、一足早い戦国時代に突入していきました。

このような状況の中で、山名氏は播磨・備前・美作三か国の赤松氏の遺領を継承し、従来の但馬・因幡・伯耆・備後・安芸を加えて8か国の分国をもつ有力守護家に成長しました。細川氏もまた、摂津・和泉・丹波・備中・淡路・讃岐・阿波・土佐の畿内・山陽・四国にまたがる8か国の分国をもつ有力な守護家でした。この両守護家が、瀬戸内海制海権を両分する形でしだいに対立の様相をみせ、やがて幕政の主導権を争うに至りました。以上が、応仁の乱勃発に至る幕府政治の背景です。

しかし、このような有力守護の勢力関係を反映しながらも、大乱突入を導いた直接原因は、畠山氏の内紛で細川氏内部の分裂・抗争を生むことになったからです。

永正四年(1507)の冬、細川澄元は細川高国らに命じて河内の畠山義英を攻めさせた。この争いは『細川大心院記』に書かれており、それには、攻撃に加わった摂津国人衆に三宅出羽守秀村の名が見えています。三宅秀村は、摂津市域の三宅の土豪・国人と考えられま



応仁の乱発祥の地といわれている石碑  
(上御霊神社境内)

す。この戦いで高国は大いに活躍しましたが、澄元のもとにあって権威をふるう三好長輝に対して、これを喜ばない丹波守護代内藤貞正や摂津の伊丹元扶らが、高国を立て長輝に抵抗しようとした。このようにして、澄元・高国が対立し、細川の家臣も二派に分かれて、いよいよ抗争することになりました。その動乱は摂津にも打撃を与えていきます。永正五年四月の澄元と高国の争いでは、三宅氏は高国方についています。

細川氏にとっては、本拠阿波と京都を結ぶ必要上、摂津は支配下におかなければなりません。このように、頼之が応安七年(1374)摂津守護と幕府の管領を兼ねてから、代々その職分が引き継がれてきたので、それだけに摂津は澄元・高国の抗争にあたって争奪の的となりました。

「週間朝日百科日本の歴史」「摂津市史」より

担当 (茗荷)

## 第19回

埋もれた  
摂津市の歴史

発掘調査で明らかになっていく摂津市の埋もれた歴史をシリーズで紹介していきます。

平成9年度

東正雀13-1 試掘調査

その2

基本的な堆積について(2) このときの調査では、上層から近現代の 整地層および耕作土、磁器を含む近世の 遺物包含層、瓦器を含む中世の 河川氾濫堆積、土師器を含む古墳時代の 遺物包含層、遺物を含まない古墳時代以前の 河川氾濫堆積が水平な状況で確認されました。これらの状況から当該地では、河川の影響を受けながらも各時代ごとに生活の跡が残っている状況でした。

河川氾濫堆積について 当該地は現在では、山田川から 500mほどはなれた場所に位置します。よって で見られた河川氾濫堆積が現在の山田川の影響を受けたかについては、古代からの河道が判然としない中では断定はできません。長い年月、多くの人たちの手で自然河川から人工河川へと変遷していったことでしょう。自然河川のときは、網の目のように流れていたことが想定されます。また現在、平らに見える地域でも、低平な段丘や浅い開折谷などが複雑に入り組んでいたようです。このような土地を当時の人たちは、削平したり盛土したりしながら、現在のまちなみを形成してきました。

河川氾濫堆積は2次的なもので、柱穴などの遺構を含まず、土器などの遺物が散在して見つかる状況で、当時の生活を復元するのは困難と言えます。しかし、これら自然の働きかけも地域の歴史を知る上で大事なものと思われれます。

今回の調査地についても、現状では河川から離れた場所でも当時は水辺に位置した可能性があります。この河川氾濫堆積がいわゆる「水辺の祭祀」を考える上で大事な要素となります。

古墳時代の土師器を含む堆積について 上記の河川氾濫堆積にはさまれる形で、暗茶褐色を呈するしっかりとした粘質土の堆積が確認されました。この堆積から土師器の小型丸底壺、甕(かめ)、高坏(たかつき)の坏部分、獣骨が見つかりました。土器類はいずれも古墳時代のもので、布留式期に属します。この層は上層の河川氾濫時に上部が削られ約 10 cmほどが残存する状況でした。

担当 (伊部)



堆積および土器群検出状況(横から)